

## 第1回 生物多様性神戸プラン推進委員会 議事録

1. 開催日時 平成28年5月17日(火) 10時00分～12時00分
2. 開催場所 環境局研修会館
3. 出席者 武田委員、橋本委員、横山委員、島本委員、安井委員、平岡委員  
長岡委員、横田委員

### 4. 議事内容

#### (1) 生物多様性神戸プラン推進委員会開催要綱の改定について

##### ●事務局

【資料1 生物多様性神戸プラン推進委員会開催要綱について説明】

#### (2) 生物多様性神戸プラン2020の改定について

##### ●事務局

【資料2 生物多様性神戸プラン(平成28年3月 神戸市)、資料3 生物多様性神戸プラン-概要版-(平成28年3月 神戸市)について説明】

##### ●島本委員

専門部会の議論を踏まえて、目次立てや見せ方に工夫がされており、なによりデザイン的に大変親しみやすく、読みやすくなっているように思う。

##### ●橋本委員

プラン本文と概要版、それぞれ何部作成し、現在何部配布しているのか。その配布先は。

##### ●事務局

本文を300部、概要版を1000部作成しており、現在、本文250部、概要版300部程度配布している。配布先は、庁内関係部署、多様性関係団体、図書館など。ホームページにも掲載している。

##### ●橋本委員

紙ベースの方が読みやすいということもあるので、まだ余部がある概要版については、積極的に配布してほしい。また、今回横断的ということが一つのテーマにもなっていることから、環境部局関係以外にも広がりが出るよう配布先を工夫してほしい。

#### (3) 平成28年度における生物多様性保全に係る事業の実施計画について

##### ●事務局

【資料4-1 平成28年度における生物多様性保全に係る主要施策、資料4-2 平成28年度生物多様性保全に関する主な新規実施施策について説明】

●橋本委員

推進委員会について、以前から環境だけで対応しており、各局の状況も環境を通じてしか伝わってこない。そうではなく、この場に各局に出て来てもらい、委員を使って直接働きかけていくことも効果的だと考える。

参考資料1で、各局の事業の実施状況が示されていたが、取り組みがあるということは分かるが、これでは各局の事業の進み具合が見えない。進捗を数値で追うことが出来る事業も多いので、すべては無理だと思うが、いくつかでもピックアップして進捗が見えるような資料づくりにチャレンジしてほしい。

参考資料5について、コストの記載がないので、今後コストの詳細を出したらよい。また、8ページの外来種の防除については、やらなければいけないことは分かっているが非常に手間がかかるので、手間を解決するためには技術革新が必要。防除の技術手法の開発にも今後の発展形としてチャレンジしてほしい。

生きものさがしガイドの出前授業は、30年後のための活動で、観察会の実施等は、市民の裾野を広げる活動であるが、実際に行動する人への対応が不足している。プラン改定時に実施した市民団体へのアンケートでは高齢化や世代交代が課題となっており、今後活動団体がゼロになる可能性も含んでいる。神戸市だけの問題ではないが、自然環境分野で活動してくれる人を増やすリクルートにチャレンジしては。何かしたいが、どうしたら良いかわからないという人に対して、行動する人を育てるプログラムの作成にも今後チャレンジしてほしい。個人的には、企業の退職者等への斡旋、就職説明会のようなことが出来ないか検討しているところである。神戸の生物多様性の持続性を高めるために重要なことだと考える。

●武田委員長

シルバーカレッジの卒業生は、活動する人材として使えるのではないかな。

●事務局

実際に活動を行っている方も多くいる。

●武田委員長

修了生で組織を作って、活動の母体にしたら良いのでは。

●橋本委員

昨年度、シルバーカレッジでセミナーを行った際に聞いた話だが、学生も話を聞くだけという人が増えていて、昔に比べるとなかなか行動につながらなくなっているとのことであった。そういった課題認識はカレッジ側も持っているようだ。座学だけでなく、技術講習を入れたら行動につながるのかもしれない。

●島本委員

私を知っている卒業生でつくられた団体も、活発に活動しているが高齢化が進んでいる。団体の方々も、高齢化についてベースとしては意識しているが、対策がもう一歩進まない。

シルバーカレッジの生活環境コースの方は山や自然が好きな方が多い。こんなイベントがありますと告知すれば参加するが、そういった具体的な提案がないと活動になかなか結びつかない。

●安井委員

高齢者の活用もケースバイケースで、特に希少種保全については慎重に行う必要がある。これまでの経験で、あらぬ方向に走る人が多いと感じる。また、高齢ゆえ一度進んでしまうと、軌道修正が困難。一般種であればリスクも少ないと思うが。

現在、中学校や高校の生物部など若い人材へのアプローチを試みているところである。

●長岡委員

定年延長、再雇用のため、自由な時間がある年齢層が高くなっており、フィールドワークも難しくなっている。現在の活動者というのは体験のある人で、その意味が直感的にわかっている人である。今、生物多様性が自分のことと思えない人が多く、活動に近づけない原因になっている。また、親世代も経験がないことから、自然があることの意味を伝えることから始めないといけない。自分にとってのメリットがないと行動に移すところまでいかないので、一般の人に対しては身近なところからどう暮らしと繋がっているかを伝えることが大事だと考える。

農業も高齢化で非常に厳しい状況で、環境保全ということは彼らの頭の片隅にはあるが、やはりサポートがないとできない。これをする、こんな生産メリットがあるというところまでサポートするスキームが必要である。

●橋本委員

企業が農業をすると生産効率を優先するため、地域とトラブルを起こすことがある。今は地域に草刈りなど環境整備の習慣があるが、今後はそれもなくなっていく可能性がある。参考資料5は、農業をしたいという法人へのアプローチに使えるかもしれない。

●横田委員

5年前、とある計画づくりに携わった際、高齢化や不耕作地が多い状況について、元気な高齢者、大きな消費地に近いというメリットを生かして、企業が農業を実施する方策を検討したことがあるが、農地法等の壁があり断念したという経験がある。

●橋本委員

企業にヒアリングに行ったことがあるが、農地を譲ってもらえないし、貸してもらえないとのことだった。

●武田委員

最近、顔の見える販売というのが注目されている。

●長岡委員

コープでもご近所野菜というコーナーを設けている店舗がある。農家が持ち込んで、売れ残ったら持ち帰るというもので、消費者と生産者の接点を大切にしている取り組みである。すぐに売り切れてしまうため、スーパーの顔である生鮮食品売り場の一部に穴が開くこともあるが、それも受け入れる方向で進めている。

●橋本委員

そういった売り場でも環境面が前に出ていない。環境という立場から、農業に環境面をどう付加していくかが重要であり、仕組みが必要と考える。

●磯部課長

冊子を作って配るだけではだめで、地域に入っていく予定である。地域によってはブラン

ド化したいというところもあり、いくつかの地域に入って相談を受けている。近いうちに一つくらいは軌道に乗りご紹介できると思う。

●横山委員

キーナの森について、施設整備は建設、有害鳥獣は農政が対応していると思う。新しい拠点ということで、新しい概念も入れやすいと思うが、講座等ソフト面について環境が入っていくような展開はあるのか。単に場ができたというだけではもったいない。

●磯部課長

武田委員長にもご参画いただいているが、管理運営検討会を立ち上げ、環境局も入ってそこで検討している。現在、環境が開催している講座もヒアリングを受けており、こちらからの提案も含め、いろいろタイアップしてやっていきたいと考えている。

●武田委員長

既に、プログラムの検討を含め学生との協働で進めている。ゆくゆくは、指定管理者に管理運営を含め引き継がれて実施されると思う。

●安井委員

今はコンサルが音頭を取り、森活の日ということで、だいたい月 1 回学生中心で活動をしている。

●横山委員

市民にどんなプログラムが提供できるのか。

●安井委員

現在、プログラムについては試行錯誤で検討している。生物多様性に関する保全活動は原体験が重要となるので、幼稚園児や小学生に対するプログラムについて、環境局が入って実施してほしい。

●横山委員

本来であれば、そういったプログラムを提供するポストがあって、そういった人なり職業を目指す道筋が見られたりする場でもあってほしい。なんでもボランティアをお願いしてというだけでは難しいと考える。

●横山委員

今年度のアライグマの防除スキームはどのようなものか。

●事務局

今年度については、市の施設で見回りなど管理者の協力を得て実施することとしており、環境局としても初めての試みであり、捕獲個体は猟友会に引き取ってもらうという既存のスキームを活用するかたちで実施する予定。

●横山委員

神戸市は、アライグマの防除計画で市民が従事者になれるとしている。猟友会も、イノシシ等の捕獲で手一杯という状況で、アライグマの捕獲に関わってくれるほどのマンパワーがない状況である。従事者を増やす取り組みが次のステップとして必要で、そういったことを実施していかないと、捕獲数は増えたとしても個体数を削減していくところまでいか

ない。狩猟者の裾野を広げるような取り組みに一步進んでいただきたい。

●磯部課長

今年度、外来種対策推進プロジェクトチームを設置することとしており、その中でそういったことも検討していきたい。

●安井委員

アカミミガメ以外にも、ザリガニ、ウシガエル、ヌートリアも影響が大きいので、それらに対する取り組みも進めてほしい。

命を大切にすることと、生態系を守るの意味が正しく理解されていない。放すことが命を大切にすることだという認識がある。そういった点を、幼稚園や小学校から正しく認識できるような教育を環境局として進めてほしい。

●橋本委員

アカミミガメ防除の助成について、助成金額を捕獲数に応じて設定しているのはどういった効果を狙っているのか。

●事務局

先ずは、啓発効果を狙っているところがある。それと、事業を実施して捕獲できなかった場合にも助成を行うこととしている。多くの方に参加していただき、たくさんカメを捕獲してもらった場合に、モチベーションを上げる意味でも広く啓発効果が得られるのではないかと考えている。

●島本委員

計画策定後、これから施策の実施レベルに移るということで、様々な取り組みを計画されている。高齢者を活用するのはなかなか難しいケースもあるといった意見もあるが、現実問題として、元気な高齢者に期待せざるを得ないのではないか。幼稚園や小学校の子どもを即戦力にというのは難しい。やはり元気な高齢者を中心に、活動団体等を通じて広く一般の方に理解していただいて、活動に参加していただくというのが現実的だろう。

具体的な活動をする場合、助成事業はインセンティブになる。地域環境課のエコタウン事業では、ふれあいのまちづくり協議会などを対象とした助成金で、市全域で広範囲の環境活動を展開している。このような市民と行政を直接つなぐような助成事業も一つの方策だと思うが、そういった事業をこれからも充実させてほしい。

市民活動としての外来種の防除について、例えば、一般の方から見れば、オオキンケイギクは綺麗だという印象で、何で駆除するのかという疑問を持つ。我々が駆除活動をすると、それに対してクレームが出るのが予想されるが、その際、行政から説明するような機会が持てれば理解も進むと思われる。そういった対応が可能かお聞きしたい。

●武田委員長

わざわざ市が説明しなくても、そういった活動を行っている団体が説明することで理解してもらえる問題だと考える。

●磯部課長

既存の枠組みでは、出前トークで対応可能。活動団体の説明に対して信用してもらえないというような状況があれば、例えばホームページで市の考え方を示すという方法もある。

●島本委員

武庫川流域で実際に実施しているようだが、河川敷のように個人の生活と直結していない場所であればそれほど抵抗もないと思うが、自分の身近に咲いていて、毎日愛でているとなると状況は違ってくる。アカミミガメやアライグマとはレベルの違いがある。

ただ、オオキンケイギクは市民にとって身近な存在であり、外来種問題への理解を深めてもらうきっかけになる種だと思う。

●武田委員長

地元で駆除活動を行っているが、説明すればわかってくれる状況。また、市が腕章やのぼりを貸し出してくれる。そういったことで活動がしやすくなるのでは。

●橋本委員

外来種の駆除について、外来種だから駆除するのという説明は通用しない。なぜ駆除するのかという説明が重要。

●島本委員

例えば、エコタウン活動のメニューに入れると、共通認識として全市にいきわたるので、非常にやりやすくなるのではないか。市民全体に理解を広げるような施策が必要だと思う。

●橋本委員

提案だが、施策を実施している現場を見たいがどうか。環境が実施している施策以外も含めて検討してほしい。環境局以外の部署と現場で議論やアドバイスができる。

●平岡委員

リーディングプロジェクトは非常に良い取り組みだと思う。適宜、進捗状況等をマスコミへ情報提供することが重要だと考える。

●武田委員

知ってもらうことは非常に重要。

●磯部課長

現地視察の件は検討させていただきたい。